

はじめに

この論集は日本の表装や修理について考えようと企画されたものである。冒頭でその目指すところを記しておきたい。

日本の伝世品のうち、文字や絵の多くは紙や絹にかきとどめられたものである。そしてそれらの大部分は、紙や絹として単独で伝わってきたわけではなく、いずれかの段階で表装され、卷子や掛軸、屏風や襖のような姿となっている。時代を経るなかで修理が施されるものも多いが、これも表装の技術によっている。表装は、作品を引き立て、保存に役立つ技術として東アジアで発達したが、日本においても古代に始まり、世代を超えて書画の継承を担ってきた。したがって、過去の営みをたどるうえで重要な意味をもつ資料や作品は、その履歴に少なからず表装の技術が介在している。

扱われる場にふさわしい姿に装飾する。薄く脆弱な素材を裏側から支え、保持する機能が低減すれば更新する。関連するものをつなぎあわせ、一体のものとする。用いる際には広げ、そのほかの時は小さく収納する。欠落が生じれば補填する。こうした形態や機能を支えているのが表装である。たとえば掛軸は、薄い絹や紙からなる書画を展覧し、保存するにあたって、非常に便利で合理的な特徴を持っている。必要に応じて幾度も解体し、修理することもできる。

こうした性格を考えると、表装と修理は資料や作品を陰で支える副次的な技術のように思われるかもしれない。しかし果たしてそうであろうか。いままさに出来上がったものを、どのように飾り、どのように残していくのか。過去から伝わったものを、どのように評価し、どのような姿に変え、いかにして次世代に継承するのか。表装は、高度な専門性を必要とし、高額な費用を要し、時に入手の難しい材料の調達を伴うものであり、染織、金工、木工などを含む多様な技術に支えられている。修理はものに物理的な負荷をかける行為であり、判断を誤れば価値を損なう。過去から伝わるもののうち何を残すのか、いつどのように修理するか、こうした判断の適否は時として重要な問題となり、少なくともその選択が次の時代のあり方、受け止められ方を左右する。表装と修理はそれ自体が魅力的な文化史を織りなしており、その時代の政治や社会、経済、人々の価値観や思想を背景に持っている。

表装と修理は、現代社会においても文化財保護に欠くことのできない役割を担っている。その文化財保護が困難な局面にあることはよく知られるところであろう。その深刻さに、この社会は向き合うことができていくであろうか。文化財保護に必要な労力や経費は甚大で、多くの所有者が維持や管理の負担を抱える余力を失いつつある。修理になぜ高額な費用を要するのか、説明できる者は多くない。修理技術者の後継者育成は危ぶまれ、修理に不可欠な道具や材料の生産者は減少している。たとえ修理が実現しても、委ねる技術者、修理方針を誤ればその価値を失いかねない。修理の技術と方針を確かなものとするには、携わる者の研鑽と緊張感が不可欠である。伝世品を調査・研究する専門家として、保管し展示する博物館や美術館に働く者として、そして、展覧会が頻繁に開催されることを当然のこととし、これを楽しむ者として、文化財保護ととりまく課題の解決に当事者として参画することはできないであろうか。

こうした問いに出発し、企画されたのが、表装の魅力を伝え、修理を文化としてとらえなおすことを目指

した展覧会「日本の表装」であった。京都大学総合博物館、京都府、京都文化博物館、国宝修理装演師連盟の主催のもと、京都府教育庁文化財保護課、京都府立大学文学部歴史学科が協力に加わった。多数の文化財が守り伝えられている京都において、調査、研究、保護、活用に携わる組織から担当者が結集し、いくどもの話し合いを経て実現した企画である。京都大学総合博物館会場では、現代の文化財修理の諸相を歴史的に位置づける「紙と絹の文化を支える」を開催した（二〇一七年一月十一日～二月十二日）。一方の京都文化博物館会場では、掛軸の歴史を検討する「掛軸の歴史と装い」を開催した（二〇一六年十二月十七日～二〇一七年二月十九日）。その内容を表裏一体のものとして、一冊の展覧会図録『日本の表装』にまとめて刊行した。

京都文化博物館は、こうした歴史をより広範に考究するべく、継続して展覧会を企画した。「保存と修理の文化史」（二〇一八年一月五日～三月四日）、「古社寺保存法の時代」（二〇一九年一月五日～三月三日）、「道具と材料の職人譜」（二〇一九年十一月二日～十二月二十二日）がそれである。加えて、国外で同じ問題と向き合う人々との対話を促すことを目的に、『日本の表装——紙と絹の文化を支える』の英訳『Japanese Picture Mounting and Restoring——Passing on Paper and Silk Artefacts to Future Generations』の刊行も二〇一九年三月に実現した。

本書は、これらの企画を契機として進められた表装と修理についての論究を一冊にまとめたものである。編集委員である岩崎奈緒子、中野慎之、森道彦、横内裕人はそれぞれ展覧会の企画に携わった。その他ご寄稿いただいた方々は、『日本の表装』展の連続講演会（京都大学総合博物館会場）でご講演いただいた岡興造氏、平川佳世氏、増記隆介氏、湯山賢一氏、シンポジウム「表装と日本文化」（京都文化博物館会場）でご発表いただいた板倉聖哲氏、門脇むつみ氏、高田智仁氏、谷口耕生氏、「保存と修理の文化史」展のシンポジウム「歴史のなかの保存と修理」でご発表いただいた竹浪遠氏、古川攝一氏である。諸氏には、展覧会では十分に扱うことのできなかった専門的な知見をお示しいただき、この度も意義深いご論考をお寄せいただいた。

改めて深くお礼を申し上げます。

本書の構成は以下の通りである。第一部では、昭和後期から平成にかけて劇的と言えるほどの変化を迎えた文化財修理の現場について、これに携わった方々の所見をまとめた。岩崎がまとめた修理技術者の肉声、そして装演師連盟理事長・岡墨光堂代表取締役として修理を牽引してきた岡氏、文化庁において文化財保護行政に大きな足跡を残してきた湯山氏の文章には実感がこもり、文化財修理に責任ある立場で関わってきた者の専門的な知見、表装と修理が現代社会で果たす役割の大きさが示される。そうした表装の古代から近代までの様相を、学術的な視点から論じたのが第二部と第三部の諸篇である。第二章では表装の文化史について、第三章では修理の文化史について、おおよそ論じている時代順に収録した。平川氏の論考は、西洋美術史研究としての意義に加え、こうした日本における諸相を相対化するうえで有益な視点を提供する。

表装と修理の歴史的展開を学術的に検討した論考を多数あつめる本書の試みは、おそらく歴史上はじめてのものであり、時代や地域、社会や携わる人物などによる異同を比較、検討する好機となったように思われる。資料や作品の履歴をめぐる新知見や、表装と修理に注目したからこそ得られる着眼点も多く示されている。何より、各論者がそれぞれに提起している論点は、この本を手にとつていただいた方々によって、今後ますます議論や検証が深められていくことであろう。本書が表装と修理への関心につながり、世代を超えてものを守り伝えることの意味を問うきっかけとなれば幸いである。

編集委員一同

※本稿で列挙いたしました組織・人名は、それぞれ五十音順としております。

目次

口 絵

はじめに.....

(1)

参考 文化財の構造と名称.....

(12)

第一部 現代の装潢・文化財修理

装潢師の声を聞く——技術者から見た装潢文化財修理の進化.....

岩崎奈緒子

3

はじめに.....

3

一 絵画と書跡の間.....

4

二 汚さない修理を——絵画修理の展開.....

8

三 課題を乗り越えて——書跡修理の展開.....

13

結びに代えて.....

17

表具師から装潢師へ……………岡 興造 20

はじめに——紙を裁つ、紙を貼る……………20

一 近世以前の装潢師の歴史……………21

二 近代京都での装潢師……………24

三 装潢技術による文化財修理のはじまり……………31

四 新しい修理技術、修理材料の開発……………35

五 この一世紀の大きな変化……………41

おわりにかえて……………45

古文書修理の歴史と理念……………湯山 賢一 47

はじめに……………47

一 装潢の歴史……………48

二 古文書の料紙……………54

三 古文書の保存と管理……………59

四 文書と古文書……………63

五 古文書修理の歩み……………67

むすびにかえて……………70

第二部 表装の文化史

日本中世の仏画の表装

谷口耕生 73

はじめに

73

一 仏画の掛軸装

74

二 「裱褙」の語と技術の受容

79

三 「本尊表紙」の確立

82

四 南都仏画の「新表法」

85

結語

90

『東山表具』の成立をめぐる小考

板倉聖哲 92

江月宗玩による表具の記録と制作

門脇むつみ 101

はじめに——表具文化史における江月宗玩

101

一 表具を記録する——『墨蹟之写』、『天王寺屋会記』

103

二 記録者としての特徴

107

三 表具を眺める——紹智金欄（白地丸龍文）の愛好

110

四 表具師との関わり	118
むすび	120
表装が伝えるもの——後水尾院縁の掛軸を事例として	高田智仁 125
はじめに	125
一 後水尾院縁の五幅の掛軸	127
二 般舟院伝来の後水尾院御影と大阪青山本御影	133
三 後水尾院と表装	138
おわりに	147
近代日本における中国書画蒐集と表装	竹浪 遠 157
はじめに	157
一 明治における中国書画受容と表装	158
二 大正・昭和前期における中国書画流入と関西のコレクターたち	164
おわりに	175

近代日本画の材料と表装

中野慎之

はじめに——問題の所在

182

一 基底材——絹・紙・礬水

183

二 絵画表現——膠・墨・絵具

193

三 絵画の制作

205

四 表装——表具師とその技術

212

おわりに——日本画の材料・形式・保存

217

第三部 修理の文化史

平安時代の仏画制作とその修理

増記隆介

はじめに

229

一 平安時代の仏画制作

230

二 平安時代の仏画修理

244

おわりに

257

前近代における書跡・古文書修理の諸相——現状維持の理念をめぐる—— 横内裕人

はじめに——国宝・東大寺文書の修理をつうじて 265

一 古文書の修理 271

二 書跡の修理 280

おわりに 291

護持院隆光の寺社修理——元禄期の奈良を中心に—— 古川 攝一

はじめに 295

一 綱吉政権期の寺社修理事業 296

二 奈良の寺社修理事業 299

三 護持院隆光と寺社修理——元禄期の奈良 304

四 修理の記憶——唐招提寺所蔵「十六羅漢図」 306

おわりに 311

近世における障壁画の保存と継承 森 道彦

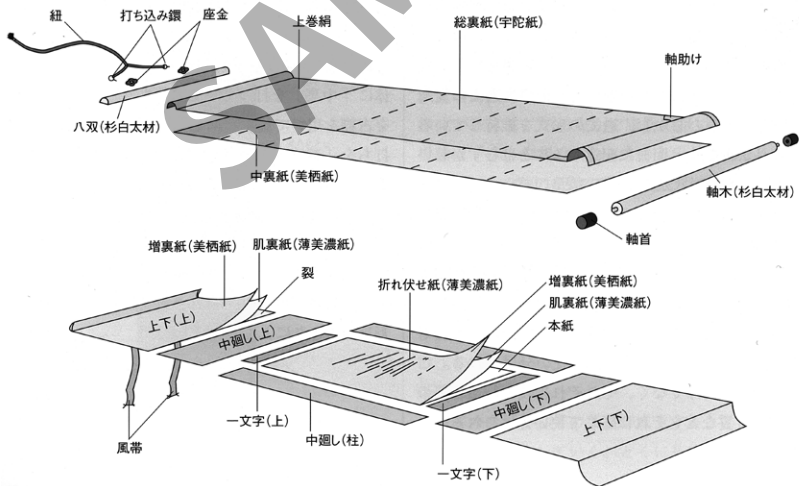
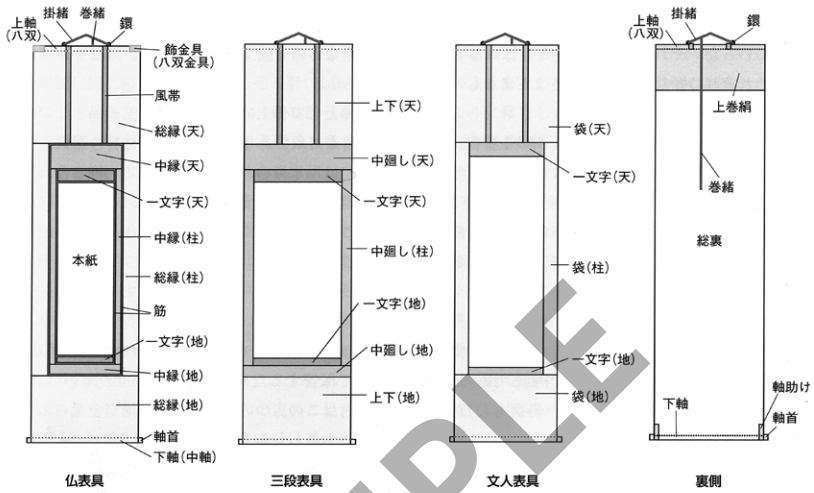
はじめに 317

一 中世障壁画のゆくえ 318

二 障壁画の保存・活用と近世社会	334
障壁画の履歴の意味——結びにかえて	355
近世ヨーロッパ美術と修復——芸術作品の受容史の視点から	371
はじめに	371
一 西洋絵画の物質的な成り立ちと堅牢性	371
二 宗教空間における芸術作品の改変	375
三 祈りの対象から美的オブジェへと変容する絵画	379
四 芸術愛好家たちの作品改変——前近代における作品鑑賞のあり方	383
あとがき	397
執筆者一覧	401

口絵にカラー掲載した図版はキャプションに「」を附した。

掛軸の構造

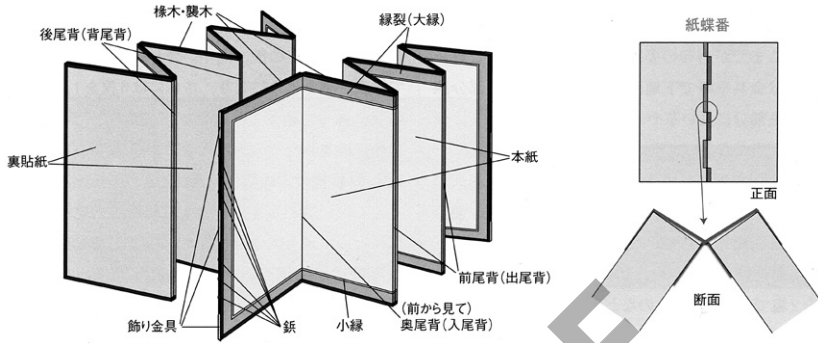


参考

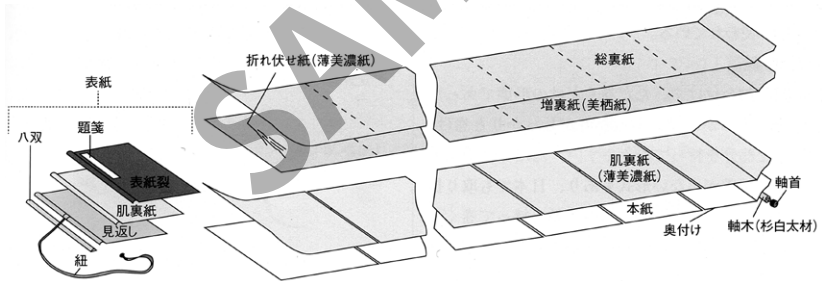
文化財の構造と名称 (『装演文化財の保存修理

東洋絵画・書跡修理の現在』国宝修理装演師連盟、二〇一五年より)

屏風の構造



巻子の構造



冊子本の構造

折本	折本(おりほん)	工程 1. 料紙を継ぐ(巻子装を改造する場合もある)。 2. 一定の幅で山折り、谷折りをする。 3. 表裏にそれぞれ表紙を取り付ける。
	旋風葉(せんふうよう)	工程 1. 料紙を継ぐ(巻子装を改造する場合もある)。 2. 一定の幅で山折り、谷折りをする。 3. 表裏をまたぐように表紙を取り付ける。
過渡的形態	旋風装(せんふうそう)	工程 1. 合紙を継いで巻子を作る。 2. 縫いだ紙の上に料紙の左辺にのみ糊を付け、ずらしながら貼っていく。 3. 巻頭に表紙を取り付ける。
	粘葉装(でっしょうそう)	工程 1. 料紙を折って重ねる。 2. 糊しろ部分に糊を付け、貼り合わせていく。 3. 天地、ノドの部分(三方)を裁って整形する。 4. 表裏に見返しを付けた表紙を取り付ける。
糊綴じ	綴葉装(でっしょうそう)	工程 1. 料紙を内折りにして、一括分を重ねる。 2. 谷折りの上側2箇所、下側2箇所に綴じ穴をあける。 3. 表・裏表紙を入れて、すべての括り(折り)を糸で綴じ合わせる。
	袋綴じ(ふくるとじ)	工程 1. 料紙を外折りにして1冊分を重ねる。 2. 背側の外から2〜3分あたりに、上下各2箇所(縫い穴)をあけ、紙縫で仮綴じする。 3. 表・裏表紙をそれぞれ組み立てる。 4. 表表紙、本文(仮綴じ済み)、裏表紙を合わせて綴じ穴をあける。 5. 綴じ糸で綴じる。
糸綴じ	大和綴じ(やまとじ)	工程 1. 綴葉装や袋綴じのように、紙を重ねて紙縫などで下綴じをする。 2. 表裏の表紙を合わせて端から少し内側に、縦に二つの綴じ穴を2箇所あける。 3. 組紐や色糸の束などで飾り結びなどとして綴じる。